小峰城よもやま話

第十九話 藤門跡の発掘調査

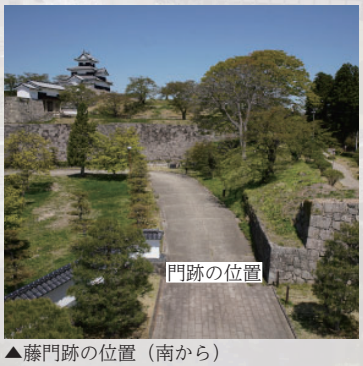
二之丸は、四方が堀に囲まれた東西にやや長い長方形の曲輪でした。各辺の中央には、堀を渡る土橋があり、橋を渡った先に門が設けられていました。

二之丸の東側に設けられた藤門では、昭和63年（1988）に城山公園整備に伴い発掘調査が行われ、一辺50㎝ほどの正方形の礎石（基礎石）が6基確認されました（下図中）。南西部の礎石の一部は確認できませんでしたが、藤門は南北3.2m、東西6mの規模であったと推定されました。

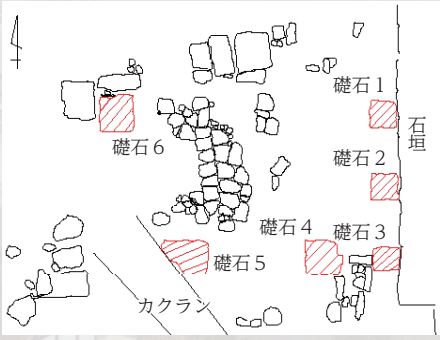
文化年間に作成された『白河城御櫓絵図』には、藤門の平面図（下図左）があり、8基の礎石が描かれています。発掘調査の結果と、絵図の内容がほぼ一致することが確認できました。

調査で確認された礎石などは、発見された状態のまま埋め戻し、保存を図りました。

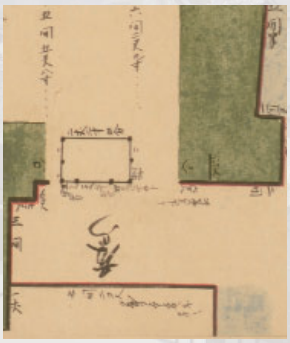
発掘調査により遺構が確認されると、門や櫓などの位置が特定されるだけではなく、絵図や文献の記載内容を検証することができます。このような照合作業を積み重ねていくことで、より詳細で正確な小峰城の姿を描けるようになるのです。



▲藤門跡の位置（南から）



▲藤門跡発掘調査平面図
（網掛け部分が礎石）


▲藤門跡平面図
『白河城御櫓絵図』より

問文化財課☎㉗2310

渋沢栄一×松平定信 南湖を彩る系譜

第十回 南湖神社創建（その一）

南湖神社の創建は、当時の川崎村（現泉崎村）の烏峠稲荷神社の社司（宮司）中目瑞男によるところが大きい。

明治41年（1908）10月、松平定信は生前の功績を称えられ、明治政府から正三位を贈位されました。この時、白河では祝賀祭が開催され、定信を顕彰する気運が生まれました。

中目は翌42年6月、伊勢神宮を参拝した際、定信を祀る神社の創建を思い立ちました。中目は以前から、白河には定信の歴史遺産がたくさんあるにも関わらず、定信を顕彰する碑や社が無いのを残念に思っていたのです。

中目は帰郷後、白河町の町会議員小出常吉と町長藤田新次郎を訪問して、南湖神社の創建を提案しました。藤田町長はこれに賛成し、神社建設に向けて動き出します。

その後、大正5年（1916）に大正天皇御大典記念として「楽翁公奉祀表徳会」が結成されました。中目は定信を敬愛する渋沢栄一の援助を仰ごうと考え、同年5月2日、藤田町長をはじめとする代表者と渋沢を訪問しました。

藤田たちは、白河において表徳会を結成し、定信の遺跡である南湖公園内に神社を創建して、偉大な楽翁公（定信）の英霊を祀りたいと考えているので、ぜひ援助を頂きたいと懇請します。すぐに渋沢は表徳会の総裁となることを承諾し、自ら2千円の寄付を申し出るとともに、財界の有力者に寄付の勧誘状を書いてくれました。

同9年6月6日、南湖神社建設の地鎮祭が行われ、渋沢の代理の田中太郎が出席。翌10年5月5日の立柱祭には、渋沢も出席しました。こうして南湖神社の建設は順調に進み、同11年に社殿が完成したのです。

▲「中目瑞男写真」
（南湖神社所蔵）

▲「渋沢栄一の顕彰碑」

（文・中山義秀記念文学館　館長　植村美洋）